松浦 年男（言語学）

長崎方言における語音調の音韻論

従来の音韻論研究では、語音調は位置（どこかという情報）が重要であるアクセントと、種類（どれかという情報）が重要であるトーンに分けられている。そして、トーンのみを持つ言語では、位置に関する情報は必要ないと考えられてきた。しかし、本論文では、トーン言語に分類される（基底形の指定でトーンしかない）長崎方言において、アクセント言語でのみ必要とされてきた、位置に関する情報が必要であることを示した。また、長崎方言における和語単純語のトーンについては、従来から比較的よく知られているが、様々な語種にわたる語音調の全体的な研究は、本論文が初めてとなる。

本論文の主張の主要部分は、第 3 章から第 5 章にある。以下、概要を示す。

第 3 章から第 5 章では、様々な語種について、音声表示を導くための基底形と音韻規則を考察した。第 3 章では、外来語のトーンを扱い、長崎方言の外来語トーンの音韻過程を、東京方言と同じ（ヒトの言語に広く見られる規則であるが）外来語アクセント規則(1)と、長崎方言特有の規則(2)の 2 つによって記述した。

(1) 次末音節が重音節ならばその音節に、軽音節ならばもう一つ前の音節にアクセントを置け。
(2) アクセントが初頭 2 モーラにあるならば、H*+L メロディーを第 2 モーラに結合せよ。

第 4 章、第 5 章では、二字漢語、人名、アルファベット頭文字語、アルファベット複合語といった幅広い語種について観察し、これらの語種のトーンに見られる規則性についても、後部要素の形態素の長さなどを参照するという点が加わりはするが、アクセントに関わる規則と、(2)の規則によって記述できることを示した。

以上のように、本論文は、一つの方言を対象に、広い範囲の語種を観察し、基底形においてトーンの対立のみを持つ言語においても、アクセントの情報が重要であることを、初めて指摘した。これは、従来の語音調の類型論的研究に再考を促すものであり、高く評価できる。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認める。